

ディスカッション

参加者からの質問をもとに、能動的な学習を促すために何ができるのか、実際にTA業務を行っている大学院生を交えて、講演者と本学FD委員長が意見を交わす。



◆ディスカッション参加者

美馬 のゆり（公立ほこだて未来大学システム情報科学部教授）
三浦 真琴（関西大学教育推進部教授）
川上 浩良（都市環境学部分子応用化学コース教授）
阪口 尚紀（都市環境科学研究科 博士前期課程2年（TA））
山下 英明（大学教育センター長・FD委員会委員長）
荒戸 寛樹（司会）（経営学系准教授・FD委員会委員）

学生主体の取組は どのようにスタート したのか

荒戸（司会） まず、ピア・チュータリングなどの学生主体の取組について、設立時の具体的な話をお聞かせください。また、学生主体の取組を始める最初の一步として、何をすればよいでしょうか。

美馬 チュータリングの制度を始めるに当たっては、初めにTAをしていた学生、学習関係や教育心理学の先生の下で卒業研究をしている学生、あるいはそういうことに興味を持っていた院生に声を掛けました。チューター研修制度は、ワークショップをしたり、集まった学生たちがディスカッションをしたりしていたのが、だんだん研修の制度になっていったものです。

三浦 関西大学には以前から授業準備などを行う授業支援学生（SA）という制度があり、そのSAの中に、もちろん先生の許可を得てなのですが、自主的に授業に入って授業の様子をメモしたり、アイデアを出したりする学生がいました。LA制度はここにヒントを得て始めたものです。

大学教育論という授業では開講時に400人の受講生がいました。4人ずつのグループを100組作ってグループワークをするのはとても難しいことなので、すぐにでもLAの支援がほしいところでしたが、新設科目には既修者がいないため、それはかなわず、困っておりました。たまさか履修届を出さずに受講している学生が「僕が手伝います」と言ってくれました。春学期にLAとして発掘・発見し

た学生にも特例として応援を頼み、なんとか大所帯でのグループワークをやり遂げました。というように当初は手探り状態でした。LAの発見・発掘に関しても、あの学生ならきっと大丈夫だろうと声を掛けてみたものの、実際にそうではなかったということも何回かありました。このようにLA制度発足当時は何度か失敗を繰り返し、LAと共に悩みながら望ましい姿を模索していった、という経緯があります。

首都大学東京の TA活用の現状は？

荒戸（司会） 今度は首都大学東京の現状を伺います。TAはどのようにして選んでいるのですか。

川上 後期にかなり専門的なPBLの授業があって、学生60名を4研究室が担当して授業や発表を行います。TAは、修士の学生の中から、与えるテキストの専門性に近く、そして面倒見が良くて学力も高い学生を選んでいきます。ですから、あまり外れることはないと思っ

ています。

荒戸（司会） その能力の高さを見込まれたTAの阪口さん、実際に仕事をしてみて、いかがですか。

阪口（TA） 実際にアシストするのは、すごく難しいと感じました。TAをしている友達もいるのですが、人によってモチベーションにも差があるので、そういうものが授業にも影響を与えてしまうのではないかと思っていました。

荒戸（司会） 山下センター長、学部生・院生の能動的学習やTA、もしくは今日紹介された先進事例の中で、本学でも導入してみたいものはありますか。

山下 本学では、これまではどちらかという大学院の経済支援を目的としてやっていたTAの制度を、授業や受講学生の支援に重きを置いた制度に変えてきています。その中で、教員と学生間の橋渡しをするようなことも、できるようにしたいと思っています。

それから、今日話を聞いて、われわれは教育改革をしようという旗を振っているだけで何もしていないと非常に反省し、組織的にこれまでとは違った取り組みをしていかなければいけないと、痛切に感じました。

プロジェクト学習のあり方とは

荒戸（司会） 美馬先生、プロジェクト学習に企業と合同で取り組む中で、企業側からのプロジェクト学習についての評価はあるのですか。また、企業でそのプロジェク

トの成果を採用することはあるのでしょうか。

美馬 本学には企業出身の先生がかなりの数いらっしゃいます。また、公立大学で職員の半数ほどが市役所からの出向ですので、2～3年いた人が交通局や病院などに異動していきます。そういう方々を通じて、テーマを設定し、プロジェクト学習をしていくことがあります。ただ、すぐに実用的に使えるものにはならないこと、これは教育の一環だということを、先方にはっきりとわかっていただくようにしています。

ですから、こういうものを行ったとしたらどんな問題が出てくるのか、どんなことに注意しなければならないのかというプロトタイプをご提示することにもなったりします。そういうことをしながら、だんだん評判が広がっているというのが現状です。

荒戸（司会） 続いて、Project-based Learning (PBL) についてです。公立はこだて未来大学では3年時にPBLを行うということでしたが、1～2年時にも行う必要性を感じていらっしゃいますか。また、分子応用化学コースでは1～2年時から始める、特に1年生後期が重要だということでしたが、他学年でPBLをされたときの印象の違いがあれば教えてください。

美馬 1年生でコミュニケーションの授業があって、チームで何かをするプロジェクト的なものはあります。ただ、われわれは専門教育をこれまで以上に強化するために、PBLを専門教育の中に位置づけました。また、違うコースの専

門教育を受けた学生たちがチームになると、自分たちの強みや頼られる部分を、もっと磨かなければいけないという自覚も生まれてきます。

川上 分子応用化学は理工系で、積み上げが必要なので、私たちのPBLは基本的には学んだことを題材にして実践で考えるというものです。学生に予習をしてきてもらおうと、極端に言うとも半分ぐらいで授業が終わるので、課題を与え、グループでプレゼンテーションなどをさせます。習ったことを題材にするのでどの学年でもでき、私も2年生でもやっています。かなり難しい課題を与えて、グループごとに発表させます。

学生から見た授業外学習の増加

荒戸（司会） 予習をして、それを基にした授業が繰り返される形になることについて、学生の立場から見てどのように思いますか。

阪口（TA） 僕も1～2年の頃は積極的に授業以外で勉強していたわけではないのですが、3年になって予習をするようになってからは授業の理解度も上がりました。

荒戸（司会） 阪口さんは現在、授業以外に週にどのくらい勉強されていますか。また、もしそれが10時間以上になったら、どう思われますか。

阪口（TA） 現在は研究室にいますので、生活と研究が同じような感じですね。学部でも、自主的に取り組むような環境になれば、決し

て多いと感じなくなると思うので、そのように変わっていくのはもちろんいいことだと思います。

荒戸（司会） 三浦先生、授業を変える、学生とつくるという意味での授業外学習と、予習してそれを基に授業を行うという場合の授業外学習では、性質に違いがあると思います。それによって動機づけも変わってくる可能性はあるのでしょうか。

三浦 われわれの場合、初年次でリテラシーを身に付けるための科目であり、知識にアプローチする体験や、問いを立てることに意味があると考えています。ただ、授業外学習はあります。中間発表をしてもらうのですが、スケジュール的にわざとハードにしてあるので、学生たちは授業時間以外に集まります。中間発表をすることを伏せておいて突然言うと、学生の目の色が変わります。

日本でラーニング・スペシャリストを活用するには

荒戸（司会） 美馬先生からアメリカのラーニング・スペシャリストについてのお話がありましたが、日本の国立大学では彼らをどのような職種や身分で採用できるのでしょうか。また、そういう可能性はあるのでしょうか。

美馬 必要となれば、可能性をつくるしかありません。われわれのところにいるスタッフは、教育学で修士号を取得し、プロトコル分析などのトレーニングも受けていますし、何より一緒に学ぼうとい

う気があるので、短期雇用の事務職員ですがセンター張り付きになっています。ジェネラリストではなくスペシャリストを採るということは、ラーニング・スペシャリスト以外の部門ではすでにあるのではないのでしょうか。

能動的学習の更なる促進に向けて

美馬 三浦先生は、中間発表をすることを知らせずに突然行うということでしたが、私たちは知らせています。実は最初の年に中間発表会の開催提案が教授会で否決されて、有志が集まってオープンスペースでやったのです。すると、それを見て意義があると感じた教員たちが多く現れ、最終発表会をしよう、次の年からは中間発表もみんなでしようということになりました。お互いに見えるようにする、他の発表を見に行くということも結構大事かと思います。

三浦 実は関西大学では今、TA研修で少し困っています。LAはチームティーチングが体に染みついています。TAは他の研究室の院生との交流が非常に薄く、悩みや疑問を共有するという意味でのコミュニティができていません。コミュニティ、場所、プラットフォームに関して、首都大ではどのように取り組まれる予定ですか。

山下 まだそこまで考えていないのですが、最初の段階で共通理解を図ろうとは思っています。ただ、そこでコミュニティができるかという、難しいでしょう。理工共通科目にはTAが何人かいて、そこではコミュニティができている

と思いますが、全学でどうしていくかというのはこれからの問題です。

美馬 三浦先生のお話にすごくヒントがあったと思うのですが、やはり学生と一緒につくるということです。われわれも制度を入れる前に、1年間トライアルで毎週集まってやっていったのですが、自分が1年生のときにどんなことで困っていたかといった話も出てきていました。実は本学では、マニュアルを作成します。それは、作るプロセスに意味があるからです。学生の方がよほど学生のことをよくわかっていると思うので、三浦先生の「学生とつくる」「学生がつくる」というのが、とてもよろしいかと思います。

三浦 私たちは、ともすると must、must not の話になりやすいのですが、Let's でないとアクティブになりにくいのです。must、must not というのは、アクティブを縛るような気がします。能面をかぶるとすごく視野が狭くなって動けなくなります。それが must、must not なのだと思います。

山下 今日は共通して PBL と TA、ラーニング・アシスタントの話が出ていたと思います。これに刺激を受けて、ご自分の授業に少しでも取り入れたり、各コースでカリキュラムに入れることも検討していただければと思います。今日は本当にありがとうございました。